

三種の神器

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

先ごろ企業の幹部の方々と雑談していて知ったのだが、若い人たちの三種の神器は、Wi-Fi、個室、コンビニだそうである。そういうえば学生を引率して山中のセミナーハウスに宿泊した際、コンビニの所在を聞かれ、あるにはあるが山を下りて街道をしばらく歩いたところで30分程度かかる旨伝えたら、大勢がぞろぞろと山を下りて行ったことがあった。Wi-Fiも納得である。街中には、Wi-Fi抜きには語れないスマホやタブレットのデジタル機器が溢れている。

最近（2025年8月末）の新聞記事によると、中央教育審議会での議論で、デジタル教科書を正式な教科書と認定することのこと。従来の紙の教科書の使用、デジタル教科書と紙の教科書の併用、あるいはデジタル教科書のみの使用が可能で、それぞれ各教育委員会が判断できるとか。デジタル教科書の内容は紙ベースと基本的に同じとするが、QRコードを通じて詳細な解説が豊富に読め、高い学習効果がのぞめるという。果たして、現在、文科省の担当者も中教審のメンバーもデジタル教科書を使って初等中等教育を受けた経験はないはず。その人たちがどうしてデジタル教科書が素晴らしい効果を発揮すると思うのだろうか。スウェーデンだったか、デジタル教科書の使用は学力低下を招くので見直しを検討している例もあるようなのだが。考えさせられる話である。

学校教育で重要なのは多くを知ることだけでは決してないだろう。疑問を持ち、自ら考え、場合によっては調査することではないのか。紙教科書のみを使用した場合、生徒がより詳細な内容を知ろうと思えば、自分から先生に相談したり、図書館に行って資料を探したりするかもしれない。その昔、筆者が小学生6年のころ、担任は農学校出で、代用教員から正規の教員になった人であった。正直なところその先生から教科について何か教わった記憶はないが、図書室で自ら調べる癖だけはつけてくれたように思う。

教育とは教え育てると言くが、ドイツ語でErziehung、英語ではEducation、いずれも育てる、育成するといった意味合いを持つ。教えるという作業ももちろん必要だろうが、それよりも育てるというのが重要である。その先にあるのは、自ら学べるように育てることではないだろうか。教師はすべて知っているわけでもないし全て教えられるわけでもない。好奇心旺盛な子供たち、生徒たちのすべての希望に応えられるはずもない。そのとき与えられるヒントは、「自分で調べてみよう」に尽きるだろう。こう書くと、QRコードで調べるのと何が違うのか、同じという方もおられるかもしれないが、先に誰かが調べてネット上に挙げたものを閲覧するのと、実際に自ら誰かと話したり書物の山の中をさまよったりして探し求めてたどり着くのとでは、決定的に発見の喜びに違いがあり、画面上だけで解決するより楽しく身に着くように思うのだが。

そのようなことに言及する人は審議会の中にいないのだろうか。あるいはいたとしても文科省の事務局が決めた筋書きを追認する大勢に埋没して発言できなかつたのかもしれない。かつてのゆとり教育もそうだし、教員不足を解消するために教員免許取得条件を緩和する話もまさにそうなのではないか。教員の負

担軽減は確かに重要な方策ではあるが、ではなぜ教員の負担が高いのかについて十分な検証もせず、基準を緩めてそれで本当に子供と共に考え、悩み、遊び、心に残る教師として存在し続ける教員が確保できるのだろうか。

電車に乗っても駅に降りても階段でもスマホを離さない。大人たちがそうなのだからそれを見習う子供たちも同じになるのは自然な流れだろう。弊害も出てきていてスマホなどの機器利用は1日2時間以内という条例を定めた自治体もあると聞く。デジタル環境が、COVID-19 まん延の状況下で大活躍したのは重々承知であるし、筆者もまた日常的に恩恵にあずかる身なので、やみくもに否定するわけではない。しかしながら学校は机上だけでのリサーチや遠隔のコミュニケーションでは得られない、より直接的な発見や思考、対話や交流ができる場であり、そしてその体験こそが後の人格形成に非常に大きく影響するはずだ。だからせめて小中学校という場は、デジタル一辺倒ではなく、適度な距離を置いた“聖域”であってほしい。それは無理な希望なのだろうか。

